

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：51303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13712

研究課題名(和文) 経済学者としての早川三代治を通じた日本近代経済学発展史の研究

研究課題名(英文) Research on the development history of modern economics in Japan through Miyoji Hayakawa as an economist

研究代表者

宮崎 義久 (Miyazaki, Yoshihisa)

仙台高等専門学校・総合工学科・准教授

研究者番号：60633831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大正・昭和初期にかけて、北海道を中心として活躍した近代経済学者である早川三代治(1895-1962)を対象とし、早川の再評価ならびに日本における近代経済学発展史の中での位置づけを明らかにすることを目的としたものである。再評価するにあたって、小樽商科大学附属図書館に新たに寄贈された資料(以下、新資料)を整理し、これまで明らかにされていない早川の直筆ノート・講義ノートの一部を電子化したほか、新資料の全体像を把握できたことに意義がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本における近代経済学の分布において、福田徳三や高田保馬らとその門下生たちを中心とする貢献は明らかにされつつあるが、早川三代治の貢献はこれまでほとんど見逃されてきた。なぜなら、早川の個々の業績が取り上げられることはあっても、彼の研究体系を考察したものは見当たらないからである。本研究では、新資料を整理すると同時に、その全体像を把握することで、早川が日本の近代経済学者の中でどのように位置づけられるかを示すことができた。特に、早川が留学経験や国内外の様々な研究者と手紙などを通じた交流および未刊行の翻訳や研究ノートの存在が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to re-evaluate Miyoji Hayakawa and to clarify his position in the history of modern economics in Japan. In evaluating Hayakawa, we have put materials newly donated to the Otaru University of Commerce Library in order and digitized some of Hayakawa's handwriting notes and lecture notes, and obtained an overall picture of the new materials, which is significant.

研究分野：経済思想史

キーワード：早川三代治 小樽商科大学 ジョセフ・シュンペーター レオン・ワルラス ヴィルフレド・パレート
近代経済学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の課題は、日本における近代経済学の礎を築いた早川三代治が近代経済学をどのように受容し、その後の経済教育や研究に応用したのかを知ることである。早川は、レオン・ワルラスやヴィルフレド・パレートといった一般均衡理論の開祖たちの最新理論を日本に紹介・導入したことで知られており、大正から昭和初期にかけて日本の経済学説史および思想史の普及・発展において貢献が見られる。また、晩年にかけて全国各地の所得データを手し、パレート法則の実証研究をまとめ、日本人で初めて国際的な計量経済学の専門誌『エコノメトリカ』に論文が掲載されたことでも有名である。

ここ数年のあいだ、日本経済思想史研究は大きな発展を遂げた。中でも、旧制東京商科大学(現一橋大学)の福田徳三(1874-1930)とその門下生たちが日本の近代経済学の普及・発展において中心的な役割を果たしてきたことが明らかにされた。しかしながら、それ以外の貢献についてこれまでの研究では十分に明らかにされていない。とりわけ、早川のように北海道帝国大学(現北海道大学)や旧制小樽高等商業高校(現小樽商科大学)出身の経済学者たちの貢献が見逃されてきた。このことから、早川三代治を中心に、黎明期における日本の近代経済学を支えた経済学者たちに焦点をあて、彼らの思想を解明することは経済学の多様なあり方を考えていくうえでも重要である。

2. 研究の目的

本研究では、早川三代治を起点として、日本における近代経済学の普及・発展においてどのような貢献がみられたのかを明らかにすることを目的とする。近年、早川三代治の新資料が小樽商科大学附属図書館に寄贈されたことをきっかけとして、資料整理およびこれまでの日本経済思想史研究において十分に明らかにされてこなかった早川三代治の位置づけおよび再評価を行う。

3. 研究の方法

日本経済思想史研究における近年の動向は、主要な図書および論文等を図書館等で調査し、それらを再読することで本研究の対象および位置づけを改めて確認することができた。早川三代治に関連する図書および新資料は小樽商科大学附属図書館を訪問し調査を行った。ただし、図書館の改修工事や新型コロナウイルス感染症の影響などによって、期間内での資料の解読・検討に関する研究はその一部にとどまった。今後は、北海道経済学界における早川の位置づけを中心に継続して研究および資料整理を進めていく。

4. 研究成果

本研究の目的は、経済学者としての早川三代治を再評価するための研究を通じて、日本における近代経済学の発展史を解明することにある。大きく3つの論点を考え、解明を試みた。

(1) 近代経済学の受容

早川は、大正7(1918)年9月に北海道帝国大学農学部農学科第一部に入学し、ジョンズ・ホプキンス大学へ2度目の留学から帰国した森本厚吉(1877-1950)による経済原論や後の指導教官となる高岡熊雄(1871-1961)による農政学などの講義を受講した。さらに欧州留学後には近代経済学を重点とした研究教育を進めた。その背景として、留学期間中に経済学者ジョセフ・シュンペーターらとの出会いが大きな転機になったと考えられる。しかしながら、今回の研究では、早川が直接的にシュンペーターから受けた影響を示す手がかりや資料を発見することができなかった。この点は継続的に調査を進めていく。また、北海道帝国大学時代の受講ノートが11冊発見されており、その内容についても可能な限り解読を進めるほか、欧州から帰国後の講義内容についても今回の調査で発見された講義ノート等の内容を検証する。

(2) 近代経済学教育の展開

早川は、欧州留学から帰国後、大正14(1925)年4月から北海道帝国大学農学部(農業経済学教室)講師として、主に経済学や財政学を教えた。また、戦後、昭和23(1948)年から小樽経済専門学校(現小樽商科大学)教授として、経済原論や経済学史をはじめ、様々な経済学教育に従事することになる。その間、研究会や学会などを通じて、国内外における近代経済学者たちとの交流が生まれ、ワルラスやパレートなどの原書の部分翻訳や解説などを積極的に進めていた。彼の交友関係を示す資料として、400通を超える手紙が発見されたほか、翻訳作業の過程で作成されたメモ等も見つかった。早川の関心はドイツ歴史学派から出発し、シュンペーターを経て、ワルラスやパレートといったローザンヌ学派の近代経済学が中心であることが先行研究からも明らかであるが、それ以上に幅広く現実の経済や近代経済学の発展を捉えようとしたことが示唆できる。今後、さらに資料の解読を進め、早川の体系を明らかにする。

(3) 近代経済学の応用研究

早川は、帰国後すぐにワルラスやパレートの経済理論に関する研究および翻訳作業に従事す

る。しかしながら、ワルラスやパレートを独自に解釈して経済理論を発展させる方向へ進むのではなく、パレート法則を基礎とし、数理統計学を応用した所得分布の実証研究に着手した。日本における近代経済学の導入を目指すだけでなく、国内の地域経済の状況を緻密なデータ収集によって裏付けようとし、その功績が研究としても認められ、*Econometrica* (1951年第19巻)に掲載され、その後早稲田大学で経済学博士の学位を取得した。この研究成果は、長年にわたる格差研究史においても重要な位置づけにあると考えられ、近年のピケティらの『21世紀の資本』での指摘とも関連付けて考えることが今後必要となる。この点は、理論的な根拠も含めて調査研究が不十分なことから、早川およびパレートらの諸研究について、丹念に解読を進めたうえで、検証する。

これらの成果の一部は、2018年の経済学史学会東北部会や経済社会学会にて発表された。しかしながら、検証内容も含めて調査が不十分だったことから、追跡調査を実施したうえで、学会誌への投稿を進める予定である。

本研究は、これまでの研究を踏まえつつ、早川三代治の新資料を中心として、その整理・電子化作業を進めるとともに、早川三代治の教育研究を体系化することを目指した。早川の研究あるいはそれ以外のことへの興味関心は非常に幅が広く、さらには寄贈された資料の数も膨大であったが、それらの資料の全体像を把握することができたことはひとつの大きな成果であると考ええる。また、欧米の多様な経済学を受容しつつ、最終的にはローザンヌ学派のパレートを中心とした所得分布の実証研究にたどりつき、近代経済学の応用研究を目指す過程そのものが当時の近代経済学者としては独自のアプローチであったと考えられる。ただし、資料を丁寧に解読した上で、これまでの早川ないし日本における近代経済学発展史の中での位置づけや貢献について、研究期間内では一部の検討にとどまった。未完の検討部分については、今後の研究で継続していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 宮崎義久 |
| 2. 発表標題 早川三代治による格差研究の視点 |
| 3. 学会等名 経済社会学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 宮崎義久 |
| 2. 発表標題 「言葉」の経済学者 早川三代治の功績 |
| 3. 学会等名 経済学史学会北海道部会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>刊行物ではないが、これまでの早川三代治の新資料に関する一覧を作成するとともに、一部電子化したものについてオンラインのデータベースに保管済みである。</p> |
|--|

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|